ギルドの片隅で飲んだくれてるおっさん冒険者

The old man adventurer who drinks himself silly in the corner of the guild.

2

哀上《Aiue》
Illustration: かれい

女将
ロルフが通う宿の女将。気遣いができる人の良さと妖艶な美しさを兼ね備えている。
獣人娘
猫っぽい見た目をした獣人の奴隷の女の子。長い間売れ残っていたところ、ロルフに出会う。
ギルドの受付嬢
ロルフが所属する冒険者ギルドの受付嬢。根は真面目だが、ロルフへの扱いは雑。
ロルフ
本編の主人公。35歳の万年Dランク冒険者。実はチート持ち転生者だが、のんべんだらりと生きている。
登場人物紹介

チートを貰い転生した。
そして、何も成し遂げることなく三十五年……
ついに前世の年齢を超えた。
それから数ヶ月、この間色々あったような何もなかったような。
あ、でもノアとの出会いは結構大きかったのかも。

しがないおっさん、またの名をロルフ

第一章　温泉

噂のAランク冒険者が俺に話があるという、突然のギルドからの呼び出しからしばらくの時間が経った。
その呼び出しには何事かと随分と身構えたものだ。
なんたって、港町に向かう途中で馬車を襲ってきた盗賊相手に大立ち回りしたばかりだったからね。
呼び出しを食らう理由には、色々心当たりがあったのだ。
まぁ、過ぎてみればどうってことなかった。
昔、俺が飲み代がなくて困ってた時に、手持ちにあった適当なノートを魔導書と称してルーキーに売ったことがあった。
そのルーキーが、現在Aランク冒険者になったノアという美青年だったというわけ。
しかもノアはそのことを恩に感じていて、俺を尊敬しており、その恩を返すために俺に王都にあ

る貴族たちが通う学園の講師という仕事を紹介しにやってきたのだった。
ま、俺はそんなことには興味はないから断ったけどね。
そんなわけで特に問題もなく話は終わったんだが。
……いや、別の意味で色々あったんだけどね。
ノアが講師の仕事を俺に紹介したのには理由があって、それは自分がやるには自信がないからということだった。
それで二人で飲みに行くことになったんだが……
そこで待っていたのは、ノアが俺のことを好きだという強烈な告白。
俺としては予想外もいいところで、元はノアに男としての自信をつけてもらうために飲みの後は娼館にでも連れていくつもりだったのだが、計画がパーである。
告白を断り、どうしたものかと迷っていると、なぜかノアが娼館に興味をしめし、俺はノアを娼館に連れていくことになった。
するとノアは俺のお気に入りの嬢を指名して、なんとその嬢から俺の女の好みを聞き出していたのだ。
しかし、まさか行きつけの娼館の娘に嵌められるとは。
いや、正確に言えば、俺はノアに嵌めさせられたわけだが。

後日、嬢を軽く問い詰めると女の友情だなんだとほざいていた。
顧客情報の漏洩も甚だしい。
俺の好みを片っ端からバラしおって。
そのおかげで、ただでさえ女の子っぽい雰囲気のあったノアが日に日に女性らしくなっている。
全く、天国なのか地獄なのか。
ってか、女の友情って。お前らは男女だろと、ノアと嬢に言ってやりたい。
女装したノアを見るのは、精神衛生上はあまりよろしくなかったが、でもまぁ、中性的な整った顔立ちのノアの女装は少なくとも目の保養にはなったか。
しかし、ノアがスカートを穿いてきた時は目を疑ったな。
もともと有名人だろうに、普段とは別の意味で街中の視線を集めていた。
ただ、おかげで自信はついたらしい。
果たしてこれがいいことなのかどうか、少々疑問ではあるが、せめてプラスに考えよう。
人生ポジティブ思考の人の方が幸せだ。
この一連の行為によってノアにいい影響が出たのだとすれば、多少の意味はあったのだろう。
俺が今回嵌められた件に関しても、俺に好意のあるノアに強引にハメられなかっただけマシ。
そう考えることもできる。

そのおかげかは分からんが、結局ノアは学園での講師の仕事を受けることにしたらしいし。
多少の意味はあったどころか、むしろきちんとノアの背中を押せたわけで。
これは向こうの一方的な勘違いでしかなかったノートの話と違って、堂々と俺が恩人面しても問題ないレベルなのでは？
と言っても、別に俺が講師になれと強制したわけじゃない。あくまでお勧めしただけ。
実際、ノアも学園での講師の仕事に魅力は感じてたしな。
問題は自信だけだったのだ。
結構強めに勧めはしたが、それでも最後は自分で決断した。
これでノアに自信をつけさせるっていう当初の目的は達成されたわけだ。
そんなノアも王都に帰っていって、俺は今一人。
色々ありすぎて、ノアのイメージが上書きされてしまったが、あれでも歴としたAランク冒険者なのだから、かなり忙しいのだろう。
むしろ、この街にしばらく留まっていたことが異常である。
「……今頃、学園の生徒相手に四苦八苦してる頃だろうか？」
王都で働くノアを思い浮かべ、俺はぽつりと呟く。
新人講師。しかも、庶民の出だ。

そりゃ学園の生徒にも舐められる。
教えるどころか、なんとか話を聞かせるだけで精一杯ってところかな？
いや、案外上手いことやってるって可能性もあるか……
まぁ、どうなるかは50―50ってとこだな。
再会したばかりの自信なさげな頃とは違って、今のノアは随分強かになった。
具体的に言うなら、俺を嵌めるために嬢と共謀するぐらいには。
その性格とすでに持ち合わせていたカリスマ性があれば、貴族の子息達といえど、案外大人しくなるかも。
学園に行ったノアからは、今もたまに酒やら食材が送られてくる。
ついでに手紙も。
俺としては講師の仕事を受けずに済んだし、望み通りになったわけだが、なぜだろう、上手いことしてやられた感がかなり強いと言いますか。
まぁ、見方を変えれば？　異世界に転生なんてして、歳も三十五を超えて、そんなおっさんになってから新しい友達ができたわけだ。
客観的に見てこれが悪いってことはないはず……うん。
〝友達〟って単語に大いに疑問符をつけられそうな気もするが。

そう、俺とノアはあくまで友達である。男女の友情でさえ成立するのだから。
相手がどう思っていても、俺が友達だと思ってるうちは友達である。
多分。
「は、ぁ～～」
俺は息を吐いた。ため息ってほど深くはない、軽く。
それに色がついた。
――白。
その白い息はゆっくりと広がり、そのまま宙に溶け、消えていく。
空気中で水蒸気が水滴に変わったらしい。
そういえば、最近は少し肌寒くなってたな。
いつの間にかここまで気温が低下していた。
思い返すとここ数日、ギルドに来る冒険者の数も減っていた気がする。
……もう、そんな時期か。
俺は窓の外に視線を向ける。白い綿、それが空から街へ降り注いでいた。
――雪だ。
視線を下に向けると、一面真っ白のまさに銀世界。

いつの間にか世間はすっかり冬になっていた様子。
しかし、俺としたことが、雪が降ってからそれに気づくなんてな。
普段はそんなどうでもいいことばかり意識して生きているのだけれど、今回は気づくのが遅れてしまった。
酒飲みにとって季節は大事だ。
酒もつまみも季節が移れば、その種類がガラリと変わってくる。
気づかなかったのは……ノアのせい、だろうな。
いつぶりだろうか？　気がついたら季節が過ぎ去っていたなんて感覚は。
ノアが帰ったのなんてついこの間のことなのに、すでにその記憶すら懐かしく思えてしまう。
なんだかんだ言いつつ、結局、一緒にいて退屈はしなかったからね。
なんだろうな、この感覚って。
ノアには散々振り回されたわけだけど、いざいなくなられると、ほんの少しだけ寂しいような。
……気分転換でもするか。
温泉にでも入りに行ってこよう。
俺は部屋の隅に適当に放り投げられた外套を羽織り家を出た。
そして外に降り積もった雪を踏み締める。

新雪特有の軽い踏み心地。
どこか癖になる感触だ。
雪が降っているとは言っても、別に大雪ってほどじゃない。
まだ冬に入ったばかり。今の時期からそんな状態だと春を迎える前にこの街が雪に沈んでしまうだろう。
俺にそんな場所で長年住み続ける胆力はない。
前世の感覚で言えば、この雪も積もるような感じではないが、それでも街は白く色づいている。
きっと、前世とは街の造りが違うからなんだろうな。
前世の街はいわゆるコンクリートジャングル。
前世じゃ、建物に、道路に、ありとあらゆる場所にコンクリートやらアスファルトが使われていた。安価で、自在に形成が可能で、寿命が長い。これ以上ないと言えるほどの最高の建材。
そして、こいつら蓄熱性能がかなり高いらしい。
熱を持ちやすく冷めにくい。つまり、降る雪が解けやすいってことだ。
その点、こっちは道と言っても基本的には土をならして押し固めてるだけだからね。
よほど整えられていたとしても石畳が精々。
この世界は必然的に雪が解けにくく積もりやすい環境なのだろう。

雪の積もった地面に足跡を残しながら、俺は慣れた道を進む。
目的地は冒険者ギルド。
あ、一応言っておくが、この世界のギルドに浴場なんて気の利いた設備はない。
あったら便利だとは思うのだが、維持費やらなんやら考えると当然の帰結。
下級冒険者に浴場に行く金銭的な余裕はないし、上級冒険者は下級と同じ設備じゃ満足しないだろう。
温泉はどうしたのかって？
いや、温泉には行くんだけどね。
その前に受付嬢に声をかけてからにしようかと。
別に大した手間じゃないし。
この前、俺がA級冒険者――ノアのことだが――に呼び出されていた時、受付嬢に街を離れるなら報告してくれると嬉しい的なことは言われたが、それは関係ない。
結局義務じゃないしね。守る義理はない。
自由なのが冒険者のいいところなのだ。
無視しすぎて縛りを増やされるのもごめんだけど。
だからって、逐一ギルドの言うことに従ってたら、せっかくの自由度の意味がないし。

そこら辺は適当に。
最悪、色々制限されたとして、それから考えればいいのだ。
俺が受付嬢に報告を入れようって理由は、それとは別。
ほら、不意にノアが帰ってくる可能性もあるじゃん？　その時、俺が行方知れずだと困るでしょ。
だから、あくまでノアのため。
あ、でもA級冒険者に迷惑をかけないって意味じゃ、ギルドのためでもあるのか。
まぁ、細かい話はいい。
ちなみに、普通は冬に街から街への移動なんてしない。
そんなの危険極まりないし。
だから、普通はしないんだけど、ノアはAランクだからね。その手の常識は通用しない。
多分、やろうと思えば王都からこの街まで単身で走って移動なんて芸当も不可能ではないだろう。
今は忙しいだろうからないとは思うけど、突然帰ってくる可能性もゼロとは言えない。
ギルドの都合のために、俺が不必要な手間をかけるつもりはないが、ノア以外の知りもしないAランク冒険者とは関係性が違うのだ。
まぁ、友達のためならね。この程度の手間は別に惜しくもない。
流石に連絡手段まで用意するつもりはないけど、少なくとも、何も知らずに待ちほうけるよりは

いいだろう。
あ、あくまでも友達のためにだからね？　他意はない。
純然たる友情、もとい友愛なので、そこら辺は勘違いはしてほしくない。
そんなことを考えながら歩き、到着したギルドに入ると、周囲から熱い視線が……
いや、街を歩いてる時から結構見られてはいたんだけど、ここは特にって感じ。
だが、ノアが来てからというもの、こんな視線はもう慣れたものだ。
正確にはノアが外でスカートを穿くなんて暴挙をやってからだろうか。
ノアは有名人だからね。当然のようにその姿は注目の的になり、一瞬で変な噂が街中に広まった。
そのついでに、隣にいた俺も、という形である。
ノアの彼氏扱い、的な？
その日はただ普通に飲みに行っただけなんだけどね。
ノアがその日から唐突にスカート穿いてきただけで。
別に、デートとかをしていたわけではない。
そのあとも会ったりしていたが、少なくとも、初めはデート的なものではなかったはず。
ま、街の奴らは絡んでこないから別にいいんだけど。
ただ訝しげな視線を向けられるだけ。

目立ってんなぁと、そんな感想を抱く。
もともと俺は、薬草採取だけやって昼間からギルドで飲んだくれてたわけだし、結構悪目立ちしてて、顔を指されやすかった。
今は単にその比にならないってだけで。
まぁ、相乗効果もあったのかもな。
普段飲んだくれてる俺みたいなおっさんが、この街の英雄様と噂になったとなれば、そりゃみんなも気になりますよねって話。
そんな状況の中、俺を呼ぶ遠慮のない声。
見るまでもない、声の主は受付嬢だ。
「あ、彼氏さん、いらっしゃい！」
酷い悪ノリである。
誰も絡んでこないと言ったが、あれは嘘だ。
正確には、受付嬢は別だ。
なんでも、ノアは彼女の推しだったらしい。
その話を聞いた時は冒険者相手に推しなんて概念があったのかと驚いたものだ。
ノアに対しては、まるでアイドル扱いである。

まぁ、あの容姿とカリスマ性だし、ノアにファンがつくのも理解はできる。
しかし、俺がノアと色恋沙汰になったと噂されているからなのかは知らないが、受付嬢の対応にトゲが増した気がする。
いや、以前からそんなきらいはあったんだけど。
より雑になったというか……
本人が言うには、『脳が破壊された』とかなんとか。そんなことをほざいていた。
しかし、それで俺に冷たく接するのは、八つ当たりも甚だしい。
受付嬢的には、俺も当事者だろってことなんだろうけど。
前も似たようなことを思ったが、見直してくれたりはしないんだなと。
『私が気づかなかっただけで、推しが選んだんだから、おじさんは凄い人に違いない』的な？　そんな評価になってくれてもよさそうだが、そういうことにはなってくれないらしい。
受付嬢が言うには、『ノア様が凄いだけでおじさんはおじさんのままなので』とのこと。
一貫して受付嬢の態度が悪いというのは、流石にどうかと思うけど、ここまで潔いと逆に好感を持てるまである。
まぁ、受付嬢の言うことは全くもってその通りか。
俺自身は以前と何も変わっていない。

いや、いろんな意味で経験値は増えたかもしれないが、それだけ。
ノアから仕送りを貰えるようになって、働く頻度がさらに減少したまである。
俺はヒモかな？
「それで。おじさんは、今日もいつもの草むしりですか？」
受付嬢は、まるでさっきのふざけた挨拶がなかったかのように、薬草採取を『草むしり』と言って、仕事の話を振ってきた。
ま、さっきのはただの悪ノリだろうしね。
受付嬢の中では、軽いコミュニケーションの一環だったのだろう。
俺もそこに触れることなく返す。
「いや、しばらく家を空けるから一応報告だけしておこうと思って」
「え、おじさん。またどこか行くんですか⁉」
「まぁな」
「でも、珍しいですね。おじさんが律儀に旅の事前報告なんて」
「この前ギルド長に言われたからね」
「そんなの気にする人じゃないですよね？　そもそも、この前のことなんて関係なく冒険者が所属ギルドのある街を離れる際は報告を入れるのがマナーと言いますか……」

「罰則は？」
「いえ、別にないですけど」
「そゆこと」
「はぁ～。それで、なぜ今回はご報告に？」
「ほら、ノアが突然帰ってきて、俺が行方知れずだったら困るだろ？」
「……自慢？」
「いや、ちげーよ」
ほんとこいつ……
俺のおかげで憧れのノアと多少なりともお近づきになれたんだからさ。少しは感謝してくれてもいいのよ？
まぁ、こいつが変に行儀よく接してきたら、それはそれで違和感凄いんだろうけど。
見てみたいような、見てみたくないような。
呆れたような表情を浮かべた受付嬢が、やれやれとでも言うように口を開く。
「また港町ですか？」
「それは秘密」
「報告に来たのに秘密って。それ報告の意味あります？」

「いないって分かるだけでも違うでしょ」
「ま、それはそうですけど。そもそも危ないですよ？　冬に他の街に行くなんて」
「大丈夫、大丈夫」
行き先は言わない。遠いからね。
この時期に温泉街に行くとか、普通の感覚なら、どれだけ時間かけるつもりなんだって話だろう。
実際そこまで街を空けるつもりはないが、俺の場合はチートのせいで行き先と時間の整合性がとれず、破綻する。
あぁ、そんな裏事情もあって、俺は今回の旅で馬車を使うつもりはない。
そりゃあ、馬車に乗った方が旅をしているっていう雰囲気は出るけどね。
だけど、受付嬢が忠告してくれた通り、今の時期に街の外へ出るのは身の危険を伴うのだ。
もう雪も降り始めちゃっているし、この前俺が港町に行った時とは、周囲の状況が色々と違いすぎる。
この世界では、盗賊の駆除さえままならないっていうのに、ましてや街道の雪かきなんて誰かがしてくれているはずもない。
寒さのおかげで魔物の活動は多少大人しいかもしれないが、雪道を馬車で進む苦労を考えれば、それで帳尻が合うとはとても言えない。

一度雪が積もってしまえば、ほぼ道なき道を進むことになる。
どこが街道かさえ判別できない状態だ。
そんな中で、もし馬車が立ち往生したら、その都度雪を退けて地道に進むしかない。
もはや旅行というより、冒険と言った方がいいまである。
あとは、そもそもギルドから出ている馬車の便自体も少ないし、おまけに料金もかなりの高額になっている。
御者だって命懸けだし、値段が高くなるのは当然っちゃ当然なんだけど。
それに加えて、その数少ない馬車に乗れたとしても、目的地まで何泊かかるかは全くの不明。
とにかく不確定要素が多すぎる。
実際に出発してみないことには分からないことだらけだし、流石に馬車で行こうという気にはなれない。
俺がそんなことを考えていると、受付嬢がさっきまでの軽い調子とは違い、かなり心配げな表情を浮かべている。
「……本当に、道中の危険を分かってます？」
「分かってるって。俺のことを心配してくれて、ありがとさん」
「別に、おじさん自身のことを心配してるわけじゃありません！」

「え？」
「もしノア様を悲しませるようなことがあったら……その時は殺しますからね」
あ、そういう心配……
確かに、推しの悲しむ姿を見たくないのは分かる。
だからってその言い草はどうなの？『殺す』って。
表面上ぐらいは俺の心配してくれてもいいじゃん。
それに、ノアが悲しんでるってことは、俺はすでに死んでる状況じゃないか？
その上での受付嬢からの追い討ちである。まさかだけど、死体を探し出して、滅多刺しにしたりとか、そんなことするつもりじゃないよね？
まぁ、これも彼女なりの照れ隠しなのだろう。多分。
さて、受付嬢への報告も済ませたことだし、善は急げ、思い立ったが吉日だ。
早いとこ、目的地へ行きますか。
俺はギルドを出て、その足で大通りを自宅とは反対方向へと抜けていった。
門をくぐり、街の外へ。そのまま歩いて、いつもの森の中に入る。
普段なら、ここは薬草採取ぐらいでしか立ち入らない場所だ。魔物がいる森だし、当然ながら建物があるはずもない。つまり、用もないのに来るようなところではないのだ。

ではなぜ、依頼も受けていないのにわざわざこんなところへ来たのか。
もちろん、それには理由がある。
今回、温泉までは転移魔法を使ってサクッと移動する予定。ほんとチート様様である。
ならどこからでも行けるのでは？　って話なんだけど、そこは念のため、ね。
転移魔法を使う瞬間なんて誰かに見られたくないし、街の中だと色々と不都合が出るのだ。
人目を避けるのが絶対に無理だとは言わないが、仮に上手く避けたとして、どこかの建物に入ったまま消えたなんて噂になっても厄介だ。
今の俺はノアの一件もあって、かなり人目につきやすくなっているし、あまり迂闊な真似をして面倒な噂を広められたくはない。
この世界は村社会的な側面が強いから、悪い噂が回るのは一瞬。
街と街の間での情報のやり取りこそ遅いが、その代わりと言えばいいのか、内輪での情報共有は本当にあっという間。
そういう気質があるのはもともと感じていたが、ノアとの一件でそれを強く実感した。
転移魔法を使うために、わざわざ森まで出てきたのも、そんな事情があってのことだ。
ここなら人も多くはない。
この森に用のある人間なんて精々冒険者ぐらいで、一般人はまず立ち入らないのだ。

それに冒険者にしたって、蓄えに余裕がある連中は冬になったらとっくに依頼をこなすのをやめ、休養に入っている。
旅ほどじゃないが外に出るのは危険だし、ますます森に入る人数が減っている状況だ。
木々で視界も遮られるし、この森は色々なリスクを最低限に抑えられる理想的な環境なのだ。
俺は辺りを見回す。
ざっと見た限り、人はいない。
一応、魔眼も起動しておく。目に魔力を流して周囲の魔力を可視化する。
人間や魔物、薬草なども魔力を保有しているため、その存在を確認するのに魔眼は最適なのだ。
まぁ、ここで薬草を見つけてもしゃーないので、どんな魔力を感知するかの条件づけは普段とは別。
動いていないものを消して、サイズが大きすぎるのも小さすぎるのも除外する。
条件づけが大雑把すぎるが、今回は特定の何かを見つけたいわけじゃなくて、単に『人がいないこと』さえ分かればいいのだから、これで十分だ。
いくつか動く魔力が見えるが、これは魔物だな。形が人間とは別物だ。
一応、人型っぽいのもいるが、まぁこれもゴブリンかオークってところだろう。
こいつら数匹ずつまとまって動いているようなのだが、各集団ごとに区切って見ると体格が人に

してはやけに大柄だったり小柄だったりと、どちらか一方に酷く偏ってる。
それにそもそも、魔眼に映る魔力自体があまり人間らしくない。
絶対かと言われると、ちょっと迷いなくうなずけるほどではないのだが、一度目視で確認した上でのダブルチェックだから、これで十分だろ。
よし、問題はないな。
『転移』
転移魔法を使用した瞬間、景色が一瞬で変わる。ただ、それだけ。
特に浮遊感を感じたり、転移したことで酔ったりとかはしない。
前世の感覚でたとえるなら、ＰＣでブラウザのタブを切り替えたぐらいの感覚？
もちろん実際に起きている出来事としては全く違うのだが、それぐらいシームレスだ。
多分、コップ満杯に汲んだ水を一滴もこぼさずに目的地まで移動できる。
それになんの意味があるんだって話だけど、要するにそんだけ快適ってことだ。
しかもこの転移魔法、一度行ったことがある場所ならどこにでも行けるという超便利なチート仕様。
転移で景色が変わったとは言ったが、転移先も同じく森の中。
転移前、せっかく手間をかけて人目を避けたのだから、これでいきなり街中とかに転移したら全

くもって意味がない。
あと、普通に危ないし。
転移先に人がいたら悲惨である。
チート仕様のおかげで俺自身が傷つくことはないのだが、その代わりに転移先の空間が抉り取られるわけで。
つまり、そこに人がいたら、その人の体に人間大の大穴が開くことになる。
当たりどころによっては即死だ。しかも、スプラッタ映画と見まごうグロい死体の出来上がり。
ついでに俺の方も血まみれになる。全くもっていいことなしだ。
だから、同じく人目がなさそうなこの森を転移先に指定した。
チートにもデメリットはあるのだ。
なので、またここに行きたいなと思った時、必ず安全そうな転移先の空間に目星を付けてから帰ることにしている。
あやふやな記憶を頼りに転移魔法を使うと碌なことにならないからな。
一応、こちらでも魔眼を起動し、周囲の魔力をチェックする。
辺りに人はいないな。
人型の魔力の反応はない。この辺りの森だといつものことでおそらくゴブリンやらオークの類い

はここじゃ少ないのだろう。森ごとに結構生態系も変わるのだ。
森を出て、街まで少し歩く。
すると港町のものよりさらに小さな門が見えてきた。
ここが今回の目的地だ。
周囲の視線を気にしてなんだかんだと手間をかけたが、それでも延べ数十分もかかってないのではなかろうか。
窮屈な馬車に揺られるよりよっぽど楽だ。ま、それと引き換えに、せっかく旅先に着いたというのにまだあまり旅行の雰囲気は出ていないのだけれど。
そんなことは置いておいて。
ビバ、温泉街！
門番から軽いチェックを受けて門をくぐる。
今更だけど、こっちの天気も変わらずの雪模様である。
こっちは俺が住んでるウーヌの街より気温が低いし、向こうで降ってたのだから、そりゃ降ってますよねって、当然の話だ。
雪国ってほどではなかったと思うが、それでも年間の降雪量は多いのだろう。
あくまでウーヌの街に比べればって話だけど。

もっと積雪量が多いとこもあるが、たとえ転移ができても真冬に行くような場所じゃない。
それに、そういう場所であっても、おそらく前世の『雪国』って言葉のイメージほどは積もらないはずだ。
前世じゃ、冬になると何メートルも雪が積もって道路脇に雪の壁ができてるみたいな雪国、東北の映像を当たり前のように目にしていた。
転生してしばらくは、冬の温泉といえばあの豪雪あってこそってイメージもあったものだ。
けど、そもそも日本は前世の地球でも有数の豪雪地帯だったみたいだからね。
一定以上の都市の規模だと、世界の積雪量ランキングのトップ3だか5あたりは日本が独占してたんだっけ？
普通、あんなに雪が積もる場所に人は街を作れないのだ。
要は、この世界にとんでもない豪雪地帯にある温泉街は『行く・行かない』の前にそもそも存在しないってこと。
街の大通りを歩くと、あちこちから煙が上がっているのが見える。
別に火事とかではない。あれは湯気。
来る途中に見かけはしなかったが、確か外の森の中にもいくつかあったはず。源泉が。
つまり、あそこから温泉が噴き出しているのだ。

硫黄の匂いとでも言えばいいのか、ゆで卵を作った時に感じるあの匂い。前世で温泉地に行くと毎回鼻をついた、臭いんだけど不思議と不快ではない匂いだ。
ただ、ここはそれとは少し違う。
というか、こっちの世界に来てから硫黄の匂いのする温泉は行ったことがないかもしれない。
でも、独特な匂いがすることに変わりはない。
結局、この世界でも温泉は地下からの噴出物だからね。
匂いについては、この世界特有の鉱物の影響だろう。
詳しくないから種類なんかは分からんが、例えるならミスリル的な？　もっと価値は低いものだろうけど、何かしらのファンタジー鉱物が地下に眠っているのだろう。
不思議なことに、それでもこの匂いを嗅ぐと、どこか心が落ち着くことに変わりはない。前世で温泉街に行った時のあの気分。それと似たようなものを感じられるのだ。
理由はよく分からない。
単に温泉に対するイメージの問題なのか。もしくは、異世界に来てからも何度も温泉に来て、この匂いを嗅いでいるからなのか。
この匂いを嗅ぐと条件反射で温泉でのリラックス効果を感じてしまう、いわば『パブロフの犬』のような状態になってる的な？

あとは、この体が異世界生まれだからって説もあるな。
遺伝子にそう書き込まれてるという可能性もなくはない。
まぁ、正直そこら辺はどうでもいい。
なぜなら、理由が分かったところで『だから何』以外の感想が浮かばない自信があるからだ。重要なのは、異世界でも変わらず温泉を楽しめてるってこと。それだけだ。
この街に来たのもざっと一年前。去年の冬以来だ。
別に冬以外の季節に来てもいいんだけど、俺の中では、温泉といえば冬というイメージが強い。
そんなこんなで、久々の温泉街である。と言っても、一年程度で街並みが大きく変わるはずもなく、よく見慣れた光景だ。
ただ、ここはウーヌの街や港町と比べると少し違うところがある。
街並みが違うと言えばそれまでだが、この差にはしっかりと理由がある。
実はここ、ちゃんと『観光地』なのだ。
この世界では珍しく、門を入ってすぐのところには土産物屋なんかも並んでいる。まぁ、前世の観光地ほど大規模ではないけど。
そもそも、交通インフラの安定した前世と比べるのは間違いな気もする。観光っていう産業の規模が前世とこっちでは桁違いだし。

でも、観光地に来れば、テンションが上がることに変わりはなく、色々と散策したい気分になる。
が、その前にひとまず宿を取ってからだな。
普段の旅先では大抵娼館に泊まってるんだけど、流石に温泉地でそれはないでしょってことで。
せっかく温泉に入りに来てるのに、温泉宿に泊まらない理由がない。
温泉に入らず、ただのお風呂で済ませてしまうのはナンセンスもいいところだ。
まぁ、もしかしたら源泉掛け流しの娼館なんて変なコンセプトのお店もあるのかもしれないけど。
まあどう考えても、それだと温泉の方に集中できないし。
別に今回は女の子を楽しみに来てるわけじゃないからね。目的がブレるってもんだ。
やっぱり、温泉を楽しむなら、それに特化しないとだよね。
なだらかな坂道を少し上って小高くなったところ、その奥に目的の宿がある。
そこが俺の行きつけの温泉宿だ。
この時期は毎年来てるからね、すっかり常連客。
宿に関しては、飲食店なんかとは違って、いくつも比べたりとかあんまりしないし、娼館と違って店の価値が女の子に依存したりもしないから、気に入ったらそのまま。
経営にトラブルなどなければ、毎年結構高いクオリティーを維持してくれるので、新規の宿を開拓するモチベも薄まるってものだ。

まぁ、たまに温泉が湧く位置が変わったり、それこそ成分が変わったりなんてこともあるらしいが。
とはいえ、そんな数年単位で起こることじゃないし、知識があるだけで実際に体験したことはない。
そもそもこれは前世の話だしね。この世界でもそうなるのかは不明である。だから、もうしばらくは変わらずこの宿にお世話になることだろう。
すると見えてきたのは、和風とは少し違うのだろうが、木材中心の造りの建物。
そこにどこか日本の面影を感じてしまう。
ウーヌの街も港町も、細かい違いはあれど、建物は大体石造りだからね。
一応、木を全く使わないってわけじゃないのだが、基本は石。
木材は装飾目的であしらわれてる程度だ。そんなだから、この宿には余計に和を感じる。
ま、木造建築がどうこうという話より、どちらかといえば、温泉という要素が強い気もする。
前世のアニメや漫画なんかだと、温泉は日本の文化の象徴的に使われることも多いしね。
温泉は日本に根差した文化である。
あくまで俺の個人的な感覚の話だけど。
雪化粧された宿の外観だけで一杯始められそうなぐらいだが、別に俺は外観を眺めに来たわけ

じゃないのだ。
そして俺は宿の戸を軽く開け、声をかける。
「やってます？」
「あ、いらっしゃいませ。宿泊のお客様ですか？」
「はい」
「少々お待ちください」
宿の中に入ると、若い女性がいて、箒を片手に、掃除でもしていたらしい。
他の人を呼びに行ったところを見るに、新人さんかな？
去年はいなかったような気がする。いや、いくら常連と言っても別にスタッフ全員を把握してたりはしないんだが。
毎年来てても見覚えがないんだから、多分そのはず。
若い子が増えるのはいいことだ。
この温泉宿は、俺のお気に入りだからね。人手不足で潰れてもらっちゃ困る。
この世界、個人経営のお店が多い。その上、人間の寿命も前世ほど長くない。
結構ちゃんと儲かってそうだった店が、ある日突然の閉店とかってよくある話なのだ。近隣の人に聞くと大抵、店主の病気やらの健康上の理由だったりする。

あの子に継がせたりとかするかは知らんが、少なくとも、スタッフがそれなりにいれば、店主が体力的にキツくなっても、ある程度はやっていけるでしょ。
まぁ、経営とかしたことないおっさんの妄想だけど、見たことない新顔がいるのは、俺的には朗報である。
そんなことを考えてるうちに、新人さんが別の女性スタッフを連れて戻ってきた。
同じぐらい若い娘に見えるが、一応先輩ではあるのだろう。
「大変お待たせしました」
「いえ」
先輩っぽい彼女が対応してくれるらしい。俺は「大して待ってもいない」と軽い返事をする。
すると、彼女が俺に言う。
「……あれ？　ロルフさんですよね」
「ん？　俺の名前知ってるってことは、去年も働いていたのかな？」
「はい」
「そっか、今回もよろしくね」
「お部屋の方は、いつものところで大丈夫ですか？」
「うん、そこで」

今度のスタッフは俺のことを知っていたらしい。
ということは、以前からいたんだろう。実際そう言ってるし。
が、覚えがない。一切、記憶にない。
やはり俺の記憶力は当てにならないらしい。
考えてみれば、この宿だと精々女将さんぐらいしか、しっかり顔が思い浮かぶ人間はいないしね。
俺の記憶力、かなりボロボロでは？　なかなかの重症である。
まぁ、別に困ることはないんだが。
客側だし、スタッフのことを覚えてなかったとしても、別にそれで失礼ってことはないでしょ。
実際、俺の他の人間関係も結構希薄だし？
毎日飲んだくれては日銭を稼いでるだけなんだから、もはや記憶力なんて不要説もある。
いや、ノアが誰なのか分からず、失敗しかけたな……
ま、昔のノアのことは覚えてるのがおかしいぐらい、そのあとの関係もなかったし、時間も経ってた。
結論、無問題である！
今はこんな感じだが、記憶力に関して言えば、前世では結構困った覚えがある。
上司やら取引先の名前を覚えられないのがね。かなりキツかった。

特に、社員証をぶら下げてない奴。そういう奴らに限って中途半端に役職が高かったりして、どう名前を呼ぶのを避けるかに必死だったな。
あと、親の知り合い。
これを覚えられないのも地味にキツい。向こうは親しげに話しかけてくるんだが、こっちとしては全く記憶にないという。
親戚の葬式やら結婚式。これが、毎回なかなかの鬼門なのだ。
そんな少し苦い思い出に耽りつつ、先輩スタッフに部屋まで案内される。
案内する彼女の足が止まり、戸を開けつつ声をかけられる。
「お部屋はこちらになります」
「ありがとね」
「いえ。お食事は部屋までお持ちしてよろしいでしょうか？」
「お願い」
「承りました」
今日宿泊する部屋に着いた。お気に入りの泊まり慣れた部屋。
内装も匂いも、もはや懐かしいまであるかもしれない。
別に特別高いわけじゃない。置いてある家具も他と同じ。

普通の、二階の角部屋である。
それに、お気に入りと言っても予約してるわけでもないし、毎回、必ずここに泊まれるわけじゃない。
早い時間だから空いてたのだろう。
幸先がいい。
まぁ、そう言いつつ大体の場合空いてるのだけどね。埋まってた方がレアケース。これまで二、三回あったかどうか。
この世界じゃ、冬といえば温泉みたいなイメージもないからね。
冬はむしろ客が減る。
わざわざこの時期に泊まりに来る客なんてそう多くないのだ。
そんな感じで、大抵の場合は問題なく泊まれるわけだ。だから、予約する手間を惜しんでるというのもある。
余裕こいて、たまに埋まってて、ぐぬぬとなるのだ。
そもそも予約なんてできるのかは知らんが。
仮に数週前に予定を立てたとして、俺は転移できるから、行って戻っても一時間かかるかどうかなので別に予約をしに行くだけの移動でも大した手間じゃないけど。

他の人は予約のためにこの街まで来るってのはないよな。宿の予約のために別の宿に泊まる羽目になるし。
手紙とか？　でもそれ冬でもちゃんと届くんかね。仮に届くとしてどんだけかかるんだろ……
うん、やっぱそんなシステムない気がする。
来年の予約って手があるか？
なるほど。毎年来てるんなら、帰る前に来年の予約を入れてから帰れと。
俺がそんなスケジュール通りに動けるわけないだろ。
一年後には予約を入れた日にちを忘れてるのがオチだ。
情けない方向に向かう思考を打ち切り、俺は窓枠に手をかける。
この部屋を気に入った理由は部屋の中身ではない。ここから見える景色がいいのだ。
ちょうど、森の中に源泉が見える。
朝日をバックにすると、湯気と森のコントラストが実に幻想的。
朝風呂から戻って、窓に肘をかけて、ぼーっとそれを眺める。
俺の体からも湯気が立ち、ひんやりとした風が肌を撫でる。
まさに至福のひとときである。
そんな情景を思い浮かべていると、ドアがノックされた。

誰だろうか、特に訪ねてくる人間に心当たりはない。
さっきの先輩スタッフかな？
何か伝え忘れでもあったのだろうか。
なんてことを考えつつ戸を開けると、そこにはこの宿の女将さんがいた。
「ロルフ様、お帰りなさいませ」
「あ、女将さん。わざわざ挨拶なんていいのに」
「いえ、大事なお得意様ですから」
「そう？」
あぁ、なるほど。そういえば心当たりあったわ。さっきの案内してくれたスタッフが女将に俺が来たことを知らせたのだろうか？
この女将、俺が泊まりにくると毎回挨拶しに来てくれるんだよね。まるでＶＩＰ扱いである。
ただ、ちょっと申し訳なくもある。
俺は確かに常連ではある。常連ではあるんだが、別にお得意様ってほど金を落としてるわけではない。
毎回泊まるのも普通の部屋だしね。
だから、女将のこの過剰気味の対応に少々の罪悪感が……

ま、金額とは別に、この時期の客だから丁寧にしようってのもあるんだろうけど。
すると挨拶のついでか、女将から提案を受ける。
「湯船の方、準備できますが、いかがいたしますか？」
「あれ……もう入れるの？」
「はい。清掃の方もすでに終了しております」
へぇ、珍しい。
この宿はいつも湯船を朝風呂の時間まで開放していて、そこから清掃に入って夜にまた湯船を開放するのだ。
だから普通、この時間は清掃中。
まぁ、スタッフも増えてるっぽいし、清掃の効率が上がったのかもしれない。
昨日泊まる人が少なくてスタッフが多めに清掃に回された結果、という説もあるな。
でも、今からか。どうしよっかな。
軽く思案しつつ、俺は雑談ついでに女将にざっくりとした今日の予定を話す。
「先に宿を取って、あとは街を散策でもしようかと思ってたんだけど」
「あ、すみません。気が利かなくて」
「いや、もともと温泉入りにここに来てるからね」

「では」
「うん。散策前に、ひとっ風呂浴びてくよ」
昼間から入る温泉というのも贅沢だよな。
時間に余裕がある人間や定年後の人間の人生の楽しみ方だ。
まぁ、俺の場合、前世では定年まで三十年以上残して死んだから、そんな楽しみを味わったことはないのだけど。
……ん？
そういや俺、この間、こっちの世界で三十五歳になったな。
そういう意味じゃもう定年か。前世と合わせりゃ約七十年だもんな。
十分おじいちゃんだ。
生きてきた年月で考えたら、もはやこんな行為がふさわしいまであるか。
そこまで老成できてるとは思えないが。ま、結局は俺だしね。
若い体に引っ張られてるとかではなく、多分、体が老人になっても、考え方とかはあんま変わらない気がする。
そして、女将の案内で浴場まで来た。
浴場の場所は知ってるんだが、まぁ、接客業だし、丁寧に扱ってくれているのだ。

それに、女将自身も接客が好きなのだろう。
毎回俺が泊まりに来ると挨拶しに来てくれるし、何人も使えるスタッフがいるのにわざわざ自ら案内してくれるぐらいだし。
浴場には扉は一つ、湯船も一つしかないから当然だけど、そう、この宿は混浴なのだ。
と言っても、今の時期じゃ女性なんていないだろうけど。
この世界で女性の外出はリスクを伴う。わざわざ観光しにここに来る女性は少数派。しかも、冬。
混浴なのは、多分、女風呂が必要ないからってのが大きい理由だと思う。
少数派のためにわざわざ用意するのはね。
ホスピタリティーとしては素晴らしいんだけど、どうしても効率が悪いし、端的に言って、金の無駄なのだ。
そんなことを思いつつ、俺は服を脱ぐ。
なかなかにだらしない生活をしてるというのに、腹が出ていたりはしない。
飲んだくれでアルコール三昧だから、ビール腹になってても全くおかしくないのだが、チート様様である。
もしくは、二日に一度の薬草採取がいい運動になっているのか。
この世界じゃ浴場にタオルを持ち込む文化はないので、俺も手ぶらだ。

全員フルオープン、つまり丸見えである。
人によるだろうけど、俺は気持ちがよくていいと思う。
俺は丸見えのまま戸を開け、浴場の中に入る。
木のいい香りが鼻をつく。
そして熱気、大量の湯気が全身を包む。
浴場に人影はない。
一番乗りかな？　ラッキー！
まぁ、この時間は大抵清掃中だから、そりゃ人もいないか。
そもそも、この時間に宿にいる人間が少ないのだろう。
まだ日も高く、お昼と言っていい時間帯。大体の客は外出中だ。
前世じゃ温泉宿に泊まるなら一日中温泉に浸かってるって人はそこそこいた気がするが、こっちの世界じゃそうやって過ごす人は結構珍しい。
いや、振り返ってみると俺がそうだっただけで前世でも少数派だったかもしれないけど。
浴場に入るや否や、俺は湯を汲み、体を流す。
これはこっちの世界でも一緒。湯船に入る前に体の汚れを落とすのは最低限のマナーだ。
そして、そっと足先から湯船に浸かる。そのまま湯船に腰を沈め、肩まで。

頭以外の全身を湯に沈め、思いっきり伸びをする。
「あぁ～、極楽」
思わず声が漏れる。
凝り固まっていた筋がほぐれていく感覚。全身がじんわりと温められて、さいっこう！
やっぱり温泉っていいよね。
そんな風に俺が気持ちよく湯に浸かっていると、女将の声がする。
「湯加減、いかがですか？」
扉越しって感じじゃない。随分と近くから声をかけられてるような。
なんか、普通に浴室まで入ってきてる。
ま、混浴だしね。
でも、わざわざ湯加減の確認のために入ってくるのはどうなのだろう。
扉越しで済みそうなものだが。
なんて思ったが、なるほど。湯加減を聞いてきたのはついでらしい。
女将が手に持ってるのは……酒か。
気が利く女将だ。
前回俺が来た時に、ダメもとでわがままを言ったら聞いてくれたのだ。

テレビなんかで何度も見た光景。その度に羨ましく思っていた。
湯船に桶を浮かべて、温泉に入ったまま好きに酒を飲む。それは酒飲みには憧れの飲み方だ。
前世でも結局やったことはなかったんだが、できるならやりたいと思うだろ？
試してみて、実際最高の気分だった。
ほろ酔い気分のまま、前回、女将にもそんな感じのことを話した気がする。
女将はそれを覚えていてくれたのだ。
『今回もどうぞ』と、そういうこと。こちらから頼むまでもなくわざわざ持ってきてくれたらしい。
俺はありがたく酒を受け取りつつ返事をする。
「湯加減？　いい感じー」
「また、ロルフ様はアバウトですね」
「それぐらいがいいじゃん、細かいこと気にするとリラックスもできないからね」
「そうかもしれないですね」
女将のどこか呆れたような言葉を聞きつつ、肩まで沈めていた体を起こし、俺は酒を呷る。
やっぱり美味い。
一口目は特に美味いね、別格だ。
ただ、この飲み方。どうも普通に飲むよりアルコールが回るのが早い気がする。

体が温まり、血行がよくなってるからだろうか？　なんならもう酔ってきたような。
そこまでの即効性はないと思うんだが。
気分の問題か？
そんな、どこかふわふわした状態の俺を見て女将が少しおかしそうに声をかける。
「あら、ロルフ様。さっそくお顔が赤くなっていませんか？」
「そう？」
マジで？　おかしいな。
そんな早いことある？
そもそもチートのおかげで軽く酔いはしても、泥酔みたいなことは今までないし。
いくら条件揃ってるからって、そんな急に酔っぱらったりはしないはず。今、ちょうど湯船に浸かってるからね。うん。頬が上気したとて、それがすべて酒のせいってこともないだろう。
女将が言葉を続ける。
「お酒はお体に悪いんですから、気をつけてくださいね」
「分かってるって。でも、まだ一杯目だから、そう心配しなくても問題ないよ」
「そうでしょうか？」
「……ま、何事も過ぎれば毒、適量なら薬って言うし」

確か、『毒か薬かは量で決まる』だっけ？　誰の言葉か忘れたけど、そんな格言があった気がする。俺の言葉にどこか呆れたような笑みを浮かべる女将。
「またそれですか。しかし、ロルフ様。普段からお酒を嗜んでおられるようですし、量もとっくに飲み過ぎ、毒のように思えますが」
「適量は人それぞれ。俺はこの量でも薬なんです」
「随分と都合のいい基準ですね」
実際チート持ちだからね。別に真っ赤な嘘ってわけでもない。
それに酒は百薬の長。
少量の酒はむしろ体にいいのだ。
……まぁ、実はアルコールはたとえ少量の摂取であっても害の方がデカいみたいな話も聞いたことあるような気もするが。多分何かの記憶違いだろう。
都合の悪いあやふやな記憶を信じてもいいことないしね。
健康に関してはチートさんが上手いことやってくれるだろうし、平気平気。
そんなこんなで酒を飲んで気分の上がった俺に女将からさらに楽しげな提案が。
「ロルフ様、よければお背中流しましょうか？」
「またまた、ご冗談を」

「あら、酷い。冗談で言ったつもりはありませんのに」
「でも、このあとも仕事残ってんだろ？」
「そうですね」
「ほら。そんなことされたら、こっちも我慢できなくなって、仕事戻れなくなっちゃうかもしれないよ？」
「相変わらずですね」
「それを知ってて言う女将も女将だ。で、どうよ？」
「まだまだ若いものに任せっきりにするわけにはいきませんので」
「そりゃ、残念」
俺たちは軽口を交わし、女将は仕事があるらしく戻っていった。
我ながら酷いやり取りだったと思う。でも、こういうの好きなのだ。
向こうがどう思ってるかは知らないけど、こんなことを言っても変わらずに絡んでくれてるし。
少なくとも嫌われてない、はず。そう思いたい。
ただのセクハラな気もするが、許されてるうちはね、変に真面目に考えてもいいことはない。
しかし、女将は人がいいのかお節介が好きなのか。
俺は両方だと思っているが、本心は知らない。

立ち読みサンプル
はここまで

どちらにしても、普段の真面目な見た目に反して結構ノリが軽いのだ。
恋愛感情を持っているのではないかと、勘違いする人間も多そうなものである。
まぁ、勘違いした客に迫られたところで上手いこと躱してそうだけど。
小悪魔、いや、容姿もその妖艶さも相まって美魔女って言葉の方が相応しいかな。
女将が出ていって、広い浴室に一人、俺だけ。
腕を伸ばし、足を伸ばし、湯船の端に座っていた体勢を徐々に崩し、全身を沈める。
そこまで浸かると足に浮力を感じる。
逆らわずに全身を伸ばすように、そのまま湯船の縁に頭を預け、仰向けになるような姿勢。
流石に泳いだりはしないが、真っ裸で水面に浮くような格好になる。
これこそ一番風呂の特権である。こんなの他に人がいたらできない。
自然と、天井に視線が行く。
それをただ、ぼーっと眺める。
板張りの天井には水滴が無数についていた。それがポツポツと、湯船に落ち、波紋を作る。
リラックスしてるところに、たまに水滴が直撃することがある。そしてビクッとなるのだ。
そして視線を天井から元に戻して、酒をもう一口。
アルコールを流し込む。